

〈論〉としての利用者ミーティング - I

水田 恵

1

ふるさとのメルマガの編集を佐藤幹夫さんをお願いすることになった。私の担当は利用者ミーティングを〈論〉として、報告することである。

考えてみると 1200 人の利用者の半数以上は、65 歳以上で、軸は団塊の世代。私 (67) もその世代で、〈私〉を書くことから始めようと思いついた。ふるさとの会の若い職員が、支援対象者のこころ (成育歴の背骨) を、少しでも理解する手助けになれば、とも思う。

連載の第一回目として、団塊の世代である〈私の履歴〉について述べてみたい。

2

若い頃から毎日のように酒を飲む習慣があった、その酒をやめてから 3 年半ぐらいになる。理由は判然としない。やめる前日、大酒を飲んだ。それは今でもよく覚えている。13 歳で村の青年団で飲まされて以来 50 年余、60 を過ぎてからも休肝日がないほど、連日飲みつづけていた。

なぜ酒をやめたのか、いつも不思議に思っている。人からは「ドクターストップですか」と聞かれることが多いのだが、身体はいたって健康である。この判然としない理由 (わけ) を考えることが、団塊世代のこころの一般性といったものを若い人たちに理解してもらうのに、何ほどか役立つのではないかと、そう思いついて書くことにした。

3

困窮者支援を事業にしている中で衝撃的な発見があった。

「世界は意味の世界である」ということ。

佐藤氏の本 (『「自閉症」の子どもたちと考えたこと』) と相談室の事例検討・論議の中で、佐藤氏紹介の浜田氏の本 (「私とは何か」) で教わった。

もともと椅子と言われているものは椅子、机と言われているものは机で、それ以上、何の疑いも持っていなかった。皆も同じように、そう思っているだろうという思い込みで生きてきた。

しかし、いままで〈客観的事実〉だと思っていたことは、実は自分の〈思い込み〉であったこと、これを知った。これは驚きであった。この発見 (?) によって、私は自分の精神 (こころ) を、少しは外から眺めることができるようになった。

学生になったとき、自分の思ったことが、ことごとく他人によって壊される経験があった。うまくいかない。何だ、これは? 孤立し、追い込まれていった記憶がある。

世界が圧倒的な力で押し寄せてくる感覚。小林隆児氏の著書で書かれている「侵襲的・

迫害的相貌」という表現は大げさではない。

「私は言葉で関係性づくりが苦手なのだ」という自覚が生まれた。

しかし、〈救い〉を発見した。

若年の一知半解、稚拙ではあるが、弁証法の〈言葉〉にすがりついた。これでふるまい方を決め、とりあえず世界と私とのつながりは保たれることになった。

私の理解する弁証法とは、若年の稚拙さと思い込みの一知半解であるが、事物の発展法則であり、ふるまい方としては「現状の肯定理解（肯定）」と「否定契機の発見（否定）」、そして、「対立する二つのものがどのように同一であるのか（折り合い・共通項）」の発見というように覚えた。

この弁証法について書かれていたのは、確か野呂栄太郎の「日本資本主義分析」だったと思う。本の詳細は覚えていない。覚えているのは、これだけである。

「現状の肯定理解」というのは、まず諦観、老子も同じようなことを言っていたのではないかと思うのだが、まず諦めなさい、他者の世界を受け入れなさい。すべてを運命として受容しなさい。郷に入れば郷に従えということか。

そういうメッセージとして私は理解した。

その時から“しょうがないな”が私の口癖になった。

私はこれでずいぶん気が楽になった。子ども頃からそのように生きてきたから。

その“しょうがないな”という諦めのうえで、思い込みの違い（否定の契機）を押し出していく。この思いこみを、相手（他者）の懐で、体で表すことにした。これを〈拗ねる〉という。しかし拗ねて幾度も、どん詰まりの状況に追い込まれたことがある。

だから〈拗ねる〉気持ちわかってくれた人に、〈私〉はついて行くことにした。〈拗ねる〉状況から、他者との排除ではなく、折り合いをつけるのを作法とした。

このような作法が習慣になった。

これが私の、むら共同体からの離陸としての他者への怯え（俗に顔色窺い）という繊細さと、人からは《ひつこい》といわれる性格をつくってきた。

4

i

私の生まれは、兵庫県姫路。西播平野の真ん中で、姫路城から海側に行ったところの、ちょうど田舎の田んぼの中の、沢山ある集落の一つである。

そこには400戸ほどの集落があり、集落が隣保という小地域に分かれ、その中に私の〈家〉がある。妙善寺という浄土真宗の寺からの流れで、真宗的同族団とムラ共同体（隣保組織）の中で育ってきた。

この隣保組織は、〈零細錯圃という稲作農業〉を支える生産組織でもあり、水当番（日常から祭り等）などを通じて何百年もの時間、維持・再生を繰り返してきた生活の互助組織でもあった。

当時は家と隣保型組織が一体であった。高度成長という荒波が押し寄せる兆候におびえながら、この自他一体の安定にすがって生きた時代である。だから自他の一致が、自分自身の安心のこころをつくってきた。むらの時代であった。

ii

その“むら”から離れ、学生になった。

大学は、〈言語〉によって、関係性づくりをやらなければならない場所であった。大人になるまで“むら”で過ごし、自他一体の経験しか持たない人間が、言葉でしか関係をつくれない世界に、何の準備もなく飛び込むことになった。

“むら”は、自分が思ったことが、そのまま社会性（共同性）を持つような場所であった。しかし大学というのは、そのような安定した平穏な場ではない。自分の考えがそのまま共同性を持つような時代は、終わった。精神的には嵐の時代に入ったと言える。

そのうちこのような事態になってしまうとは、うすうす気がついていた。高度成長が“むら”の共同体を壊しかかっていた。

わが家もこの時代の荒波の中にいた。決して平穏なものでもなかった。長男の放蕩と借金。親父の遺産相続をめぐる叔父貴たちとの諍い。その他諸々の事態に悩まされてきた。少しの間はおふくろの気強さと生活力でささやかな平穏を保っていたものの、そのおふくろも 1969 年の正月に他界してしまった。親父は長命だったが、この時期に、家は壊れたと言っただけ。

iii

言語で関係づくりの苦手な上に、安心な場所であるはずの“イエ”がなくなってしまうという、ある意味で危機的な精神状態に追い込まれる事になった。

その中でも生きていかななくてはならない。けなげに考えた。

私は、知識を持って、専門家として生きることをおふくろにすすめられ、法律家・弁護士になる道を選んでいった。言葉で、専門的な知識で関係性が構築できる道であった。だから勉強した。

もうひとつ、剣道にはいった。部員同士での飲み食いなど、自他一体の疑似的家族を再現したような関係性があった。

この専門家になる勉強と剣道部の疑似的家族の相互関係が、学生時代の安定をつくった。

この安定した関係性が壊れたのが、69 年の全共闘（我々は全学闘争委員会とっていたが）運動であった。

iv

木田元氏の著書に〈「わたしの哲学入門」〉がある。その本の中に、「存在は、本質存在と事実存在に分離し、本質存在のイデア化を契機に、事実存在は非存在（操作対象）化する。これを形而上学という」という説明（私の理解！）があった。事実存在（関係性）の変化が、本質存在（公共性など社会のルール等）の改革を、つまり現実の事実存在に照応した

本質存在の改革が求められるわけだが、その筋道はなかなか一筋縄ではいかない。全共闘運動は、本質存在に対する事実存在の反逆とも言えるものだった。非合理的な情的関係、自他一体の共同性の世界から、事を始めるしかなかった。

丸山真男氏が、全共闘は戦前の軍部よりも悪いと、言ったとか言わなかったとか？

いずれにしても、私自身はその時代の流れに身を任せた。

この時の心情をどのように表現すればいいか、わからない。精神的には、後ろから押されたような気もするのだが、一挙に、あれよ、あれよという間に運動の只中にいた。

私にとって、この運動は、心情的“むら”回帰であったのかもしれない。

5

i

その後、山谷での労働運動から、困窮者支援のNPO法人を立ち上げた。

その数年後のこと、日米交流の一環としてニューヨークに行く機会を得た。当たり前だがニューヨークは日本語が通じない。外出先からホテルに帰るとフロントで部屋番号を言っただけで鍵を受け取るようになっていた。私の部屋は15号室であった。なぜか私は数字というものが万国共通だと思い込んでおり、フロントのスタッフに向かって「ジュウゴ！」と連呼するのだが全く通じない。職員の的場君が来て「フィフティーン」と英語に直してくれたところ、すぐに通じて部屋の鍵を渡された。その時は、それはそれで解決がたった。しかしそれをきっかけにして、久しぶりにパニック的な精神状態が帰ってきた。今そこにいる、そのこと自体耐えられなくなった。

自分の思い込み（意味化）が壊れてしまった時には、その場におり続けるのは苦痛だが、そうかといって逃げることもできない。繰り返し、繰り返し経験している内に、だんだんと切羽詰まった心境になってゆく。

意味化を〈思い込み〉と表現すると変なのかもしれないが、世界が〈そのように〉見えるということ、〈そのように〉見える世界は百人百様である。だから、自分が当たり前という思い込みを他者に押し付けるともっとひどい事態を招くということが分かった。

この一連の経験が、支援論を考えさせるようになった。

自分の思い込みがそのまま支援にあてはめられることになると、温情主義的・管理主義的支援論になってしまう。それが善意に由来するなら、それだけいっそう始末が悪い。自分の思いを押し付ければ押し付けるほど、相手の拒否は強くなり、パニックにまで発展してしまう。

この悪循環を回避するには、自分の思い込みをいったん脇に置くこと、いったん脇に置くことで、相手の気持になろうという情的な関係に入ること、この情的関係（われわれは「とらやの茶の間」と言っているが）のなかからこそ新しい本質（課題、彼に問題行動を起こさせた原因と解決の筋道）を発見、共有できるとした。

支援というものは、支援される人と、する人の相互の〈思い込み〉を克服し、新しい共

同性をつくる協働作業とっていい。同時に人を支援するということは、〈思い込み〉による自身の孤立をも、何ほどこか、和らげてくれるものになると思った。

ii

ここで再度、木田元氏の哲学の話にもどる。木田氏の哲学が「存在の分離以前に還れと行った立場」だと、私は理解している。分離してしまったものに対して、元に還れと言っても、もう遅いとも思うのだが、しかし、分離する以前の世界の経験（自他一体の世界）を、いったん経由してしか、本質をつくり直すことはできないのではではないか、と。そう考えるようになった。

さらに、本質を作り直すうえで大事なことは、「諍い」である。

小林隆児先生の〈甘えのアンビバレンス〉は、悪戦苦闘の、諍いの世界である。我々が「とらやの茶の間」と呼んでいる場の、母子（自他一体世界）の葛藤である。この諍いを通してしか新しい本質（課題）の発見と共有が可能にならない。

我々の互助づくりミーティングは、利用者のトラブルを契機に始まるものである。そして生活の規則（本質）をつくりかえてゆく。ふるさとの会では、これらを互助的生活支援と呼んでいるが、核心は、参加した利用者の役割関係（互助）を通して、生活環境を改造するという、自律の支援である。

iii 団塊の世代について

認知症などのメンタルの問題を抱えた利用者は、時に、急激にパニックを起こす。苦渋に満ちた顔が、彼らの辛さと深刻さを物語っている。佐藤氏の本にも、パニックは辛い、とある。

パニックを起こしている当人に、共同生活の規則をいくら言い立てても、パニックは収まるものではない。言い立てるほどに、エスカレートする。そして手に負えなくなる。最終的に退所という決着になるのはいたたまれない事態である。

パニックを起こしている彼らは、彼らの意味の世界が崩壊し、孤立している。孤立は、自他一体の安定した世界が崩壊しているということ。支援は、彼らの世界を一緒に見るところから始まる。

彼らは、私と同様に、言語を通じた関係性づくりが苦手である。しかし彼らの思い込みには何百年も続いた“むら”の住まい方、暮らし方が身体記憶としてあり、民俗として表現されているものも含まれる。

彼らの見る世界、彼らとともに、彼らの世界の安心を再構築すること。それが生活支援なのである。

昔は、安心した隣保共同体の中で生涯が送れるならそれはそれでよかった。しかし、高度成長は、かれらを安心生活から放り出す方向に進んでいった。彼らが苦手な〈言語で関係をつくる〉という社会に。

これからは団塊の世代が高齢者となる時代である。2025年には後期高齢者になる。団塊

の世代を支援する世代というのは、家族介護という連鎖の中で、世代的なツケを回らされる若い層（20代から30代）である。

先日ふるさとの会の研修で講演していただいた日下部氏の CCS レポートからは、今後の支援のための沢山のヒントを頂いた。団塊の世代、高齢者支援を産業にする、これを若者世代の雇用の場にする。この産業を地域コミュニティーが支える。昔、稲作生産を“むら”の互助が支えたように。

互助は、生活世界での、彼らの「意味の世界（思い込み）」の崩壊から再生を促すための共同性の実現である。

iv

この共同性を回復・再生する筋道を、西研氏の「言語ゲーム論」で覚えた。「他者了解→自己了解、自己了解→他者承認」。利用者ミーティングの作法でもある。

だが、この筋道は、同時に、団塊世代の、言語を通じて関係性をつくるということが苦手な世代の、孤立から回復する作法でもある。この筋道は共同性の単純な再生でなく、近代の成果を踏まえた再生でないと、うまくいかない。

意味化が思い込みであるという自覚・衝撃（孤立の諦観）から、共同性回復（普遍化）の筋道を見つけたことが、ひょっとして酒を飲まなくなった理由なのかもしれない。

まだ判然とはしないが、そのように考えている。